

稲荷 藤兵衛

佐倉から一里(約四キロ)ばかり東の方の墨村に藤兵衛という百姓がいた。この人は、いつも狐をとることがとても上手だったので、「とうか藤兵衛」といわれた。(「物類称呼」という本位、ぞくに狐を「とうか」という。「神様の使い」というので稲荷の二字を音で読んで「とうか」という。)

藤兵衛はいつも自分の家の裏にブツチメ(狐をとるしかけ)をこしらえて置き、ここへ狐をおびきよせてつかまえたという。



ある時、用事があつて常州(今の茨城県)の水戸へ行って、その帰りに、「おなばけの原」という原で狐に出合ったので、その狐をだまして自分の家に連れ帰り、裏山のブツチメにかけてつかまえたという。この「おなばけの原」から自分の家までの道のりは十里(約四十キロ)もあつてその間には渡し舟で渡る所が三か所もあつたと

のこと。

また、千葉野(千葉市方面の野原)を通つた時、狐に出合つたので、だまして連れてきてブツチメにかけようとした。だが、古狐だったので中々かからなかつた。一日、二日すぎて、その狐が藤兵衛の家の隣の子供に化けて、夜中頃、藤兵衛の家に来て、表の戸をたたき「藤兵衛、藤兵衛、ブツチメに狐がかつたから早く起きなよ。」と言つたので、藤兵衛はふつと目をさまして、「今夜はブツチメをかけはぐつたから、狐がかかるはずはない。だましているな。」と言つて、そのまま寝てしまった。



翌朝、藤兵衛が、「ゆうべ隣の子供がブツチメにかつたから行ってみてこい。」と言うので、家の者が裏のブツチメの所に行つてみると、大きな狐が一匹かかつていたという。(藤兵衛が、目をさますと

すぐ隣の子供を狐であるとわかって、機転のきいた返事をしたのは、さすが名人といえる。」

また、ある村に、狐が多くいて人家の鶏などをつかまえて食べるので、村の若者たちが相談して、籐兵衛のところに来て、「狐をとるところを見せてほしい。」とたのんだ。

籐兵衛は「それはたやすいことだ。おもしろい方法でとらえて見せましょう。」と言って、地蔵堂の庭の隅にブツチメを仕かけて置いて、「自分は山の中に入って狐を連れて来てつかまえるから、みなさんはこのお堂の中から見物していなさい。」と言って、お堂の表に竹のすだれを下げて、おおぜいの人がこのお堂にかくれて見物できるようにした。

籐兵衛はやがて仕度をして山の中に入り、酒によったふりをして大きな声で、「狐はいないか、狐やーい、早く狐にあいたいものだ。」などと呼びながら山の中を歩いていった。しばらくしてから、籐兵衛は狐を連れて、ほんとは酔った人の身ぶりで地蔵堂の前に出てきた。腰に四メートル位の縄をつけ、その先に鶏の死んだのを結びつけ、よろよろしてひきずって歩いていた。

狐は、これをとろうとして後になつたり先になつたりしてかけまわる。籐兵衛はやがてふところからゴマメを落とし、「これは大事なものを落としてしまった。このちきしょうめ、お前に食われたまるもんか、そうはうまくいくものか。」などと、ひとり言を言いながら落としたゴマメを拾っていたが、しまいにはそこに寝てしまった。狐はそれを見て、そろそろとそばへ寄り、拾い残したゴマメを食べ、

また、うしろの方へまわって鶏をひっばる。すると籐兵衛は、目をさまして、足をあげて狐を追う。このようなことを何回もくりかえしながらブツチメのところに来た。狐はしばらくあきれて見ていたが、やがて籐兵衛のようすをうかがい、だんだんブツチメの中へ入り、何回もニオイをかぎながら、ついに鶏をくわえて横つとびに飛び出そうとした。そのひょうしに、支えがはずれてブツチメにかかってしまった。

今まで狐をとることを話してきたが、そのとることの上手なことは、まるで座敷で飼っている猫をからかうようなものであったとのことです。

籐兵衛に会った時に、「狐をとる時の餌はどんなものをつかうのかね。」とたずねたら「鼠の油揚げだ。」と答えた。ほんとうのことかどうかわからない。

